2025年11月特別号
No.13文責：歳田和子

【感謝!】

11月も中旬となり秋の深まりを一層感じるようになりました。「天高く…」という言葉を思い浮かべるような青空の日は心地よく、子どもたちは昼休みも外で元気いっぱいに遊び有意義な学校生活を送っています。

日々の何気ない生活が本当は「ありがたい」ことに気づかせてくださった保護者様がおられます。今回は、その保護者様の作文を紹介いたします。ぜひご一読ください。

「ここに在る」　　保護者　角田　功揮

何一つ忘れはしない。忘れられるはずもない。私たちを選んでくれてありがとう。
「おとうさん、おかあさん。」私たちのことをそう呼んでくれるはずだった。
あなたは紛れもなく、うちの子。角田家の四男。
奇しくも、祖母が旅立った日とほぼ同じだった。
いまは祖母と一緒に居るのかな。そう想いたい。

2025 年 7 月 22 日、午前 10 時。
角田祈栄（つのだきはる）。彼の心臓は、妻のお腹の中で静かに止まった。
生涯をかけて、彼を愛する気持ちは変わらない。
生まれる瞬間に時があり、別れの瞬間に時がある。またいつか会う日まで。
祈栄は、あと少しでこの世に生まれ、みんなと共に笑ったり、泣いたり、いろんな関わりの中で当たり前のように育っていく。私たちはそう思っていましたし、そうなることを心から願っていました。しかし、祈栄の人生は、先天性の重い疾患を抱えながら、妻のお腹の中で始まり、幕を閉じました。私たちと生きて会うことはできませんでしたが、最後の時は帝王切開で生まれ、初めてその顔を見せてくれた時、彼は美しく、逞しい姿で 2300g を超えていました。彼は、重い疾患と命を懸けて闘い、そしてその短い人生の中で多くの気づきを与えてくれました。

私たちは、彼が命を懸けて伝えてくれたメッセージに気づかなければなりません。それは、「当たり前なんてない」ということです。
皆さんにも改めて気づいてもらいたいです。いまこの瞬間に「ここにいる」ということが、どれだけ尊い存在で、奇跡であるかを。産まれる前は「健康であって欲しい」、それだけが願いだったのに、いつの日か「そろそろ喋るかな」「足が速くなって欲しいな」「将来の職業は」なんて願望に変わってしまう。成長や存在の奇跡が「当たり前」の領域になっている。

しかし忘れてはいけない。学校にいけること、帰る場所があること、着る服があること、食べられること、誰かが「おはよう」と声をかけてくれること。全部が「当たり前」ではないことに。

日々の喧騒の中で、「当たり前」になっていることが多くなりすぎていて、身近な人や物事ほど「いて当然」「あって当たり前」になっているように感じます。改めて、私たちの生きる日々が「当たり前」ではないと思えたら、もっともっと感謝と愛をもって生きていけると思いませんか。私たちは、子どもたちが「健康」で「学べる」環境にいることに、改めて感謝をしなければなりません。

祈栄が生きることができなかった日々を、いま私たちは「当たり前」の惰性で生きてはいけない。祈栄には心から感謝を伝えたい。私たちに多くの気づきを「ありがとう」。